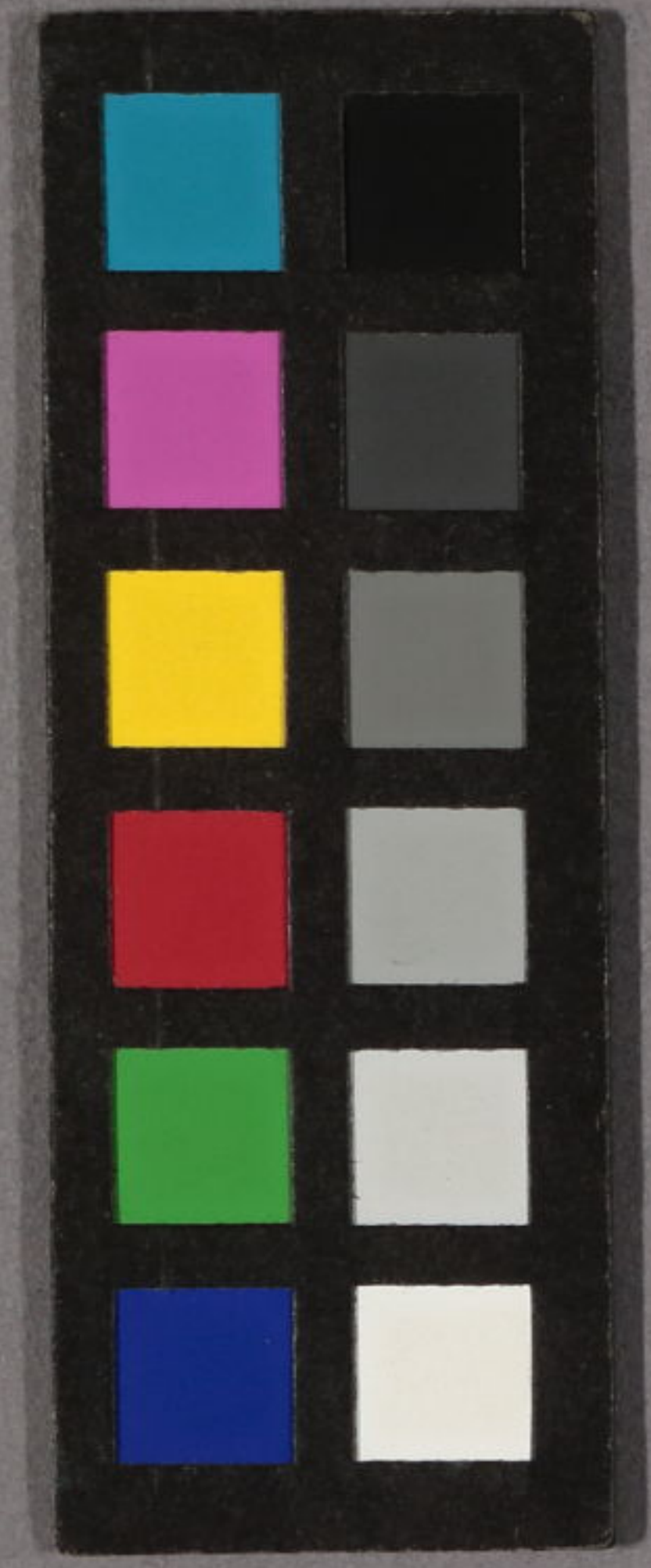


求
貝
之
娘
六

^ 13
3165
6



門 へ 13
 3165
 巻 6

謎唄三人娘第二編卷之下

東都

松亭金水編次

第五回

いひあがら。差を帯ひるひうけむ。深淵が懐妊のう
 を。今い進退谷まると。年暮より種との大恩を
 する後おれの小りとの苦さかると。是れ小あよを
 ぬ時宜ありと。慈母小迷入るの同志のと密なるふりひ

昭和九年
 九月二十八日
 購求

あひ 合せて申。心程申の空ぶらうしき。仕方ありと我あがら。惶
とあふそのおろ。手代去去来が計らひと。いと大枝の
は貨物を引取らうと。つらうふ。まご一層の苦勞を倍し。い
とせんとかりくどの。新給とめて細い違ぐん。ひとまが在
まへとち得り。その貨物の體先を穿鑿遂てそのらうで。
まご體合申まごけきと。此次小来しと。沈沈を伴ひ奔
るべき。物未の昨日と。若そのどく小まる時。若てとま
等の計較申と。大金の貨物をまごせし引おきと。らと

三下

疑ぐらまんの必定申て。全く知らぬ。或去来が所為。只吾
つが身小掛り申て。一件の帳合と申小。二百兩出さぬ。は
動定の差がく。所詮その金の延べ引。一日申るべし。ん
とかりく。まご或極して。まご小あ後の思按。つらう。子
舎小来りて。些をらうの。若物小村をうらうけ。照る日の
庭をまごめて。若り。か。新へ。後尾して。若ら。沈沈を
若希が。傍へ。ひの。傍。副て。一。昔。併。の。後。で。若て。若ら。か。
えん。と。若て。若ら。まごけ子。彼。去。来。と。い。人。の。昔。併。

おんどの雅さの時々。老ま来さんのお供をりて。来と
し由差えてあり。又を曾由お招の代りお来こと
由救回あり。あつて招みゆをさる。悪い人といひあんどが。
早竟病気でか来ごう。不家し悪くありませうが。
今うら車小お帰りて由。悪くしうらる小合まはまの何故と
いふお招が。今回此方へお出おさう也。尻がつまるとおの
う。款を隠し小遠ひあいた招して見まは強いごうらで。
か金の出所い何処小由あり。お招が腎負勢で。疎小大

三ノ下二

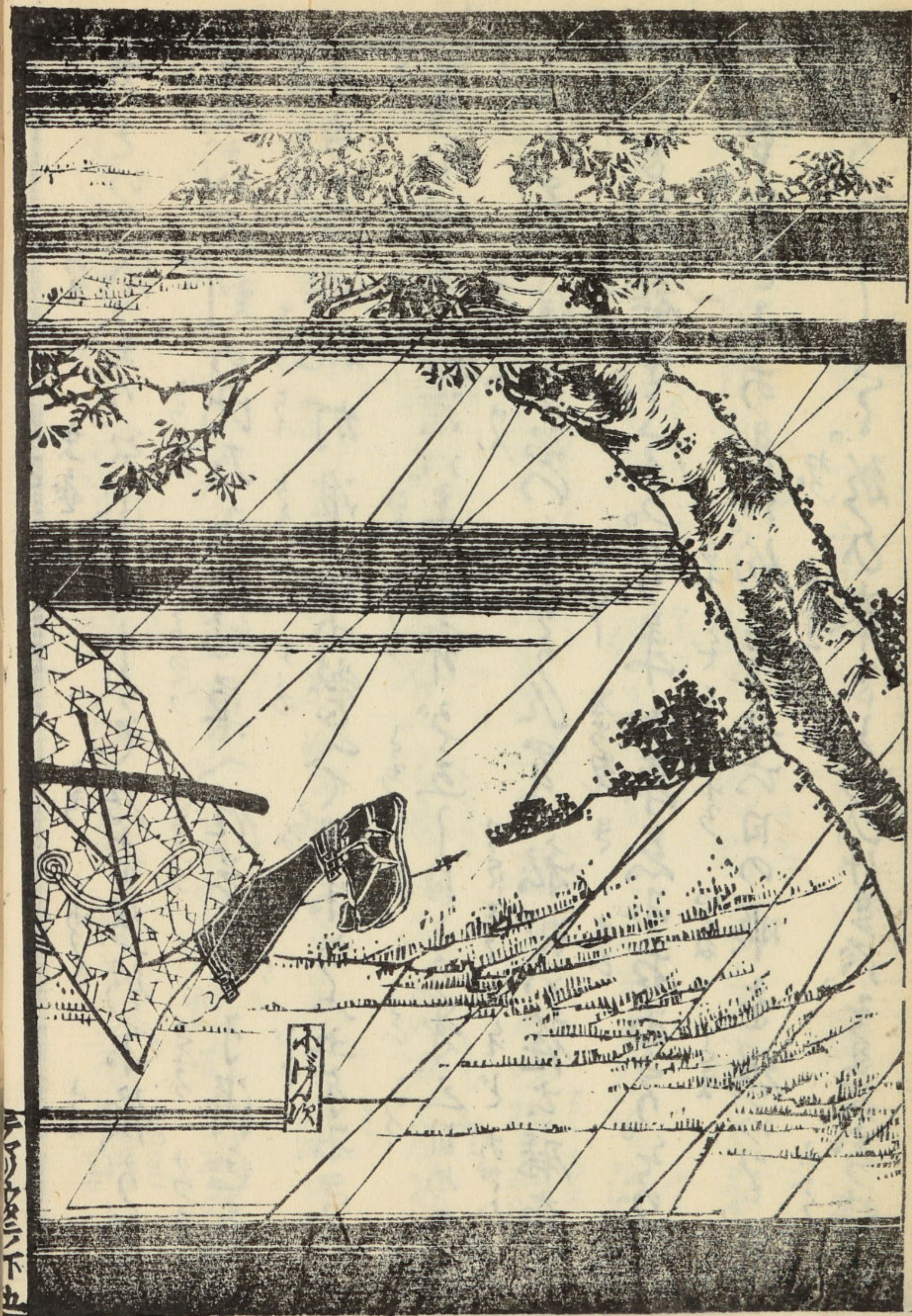
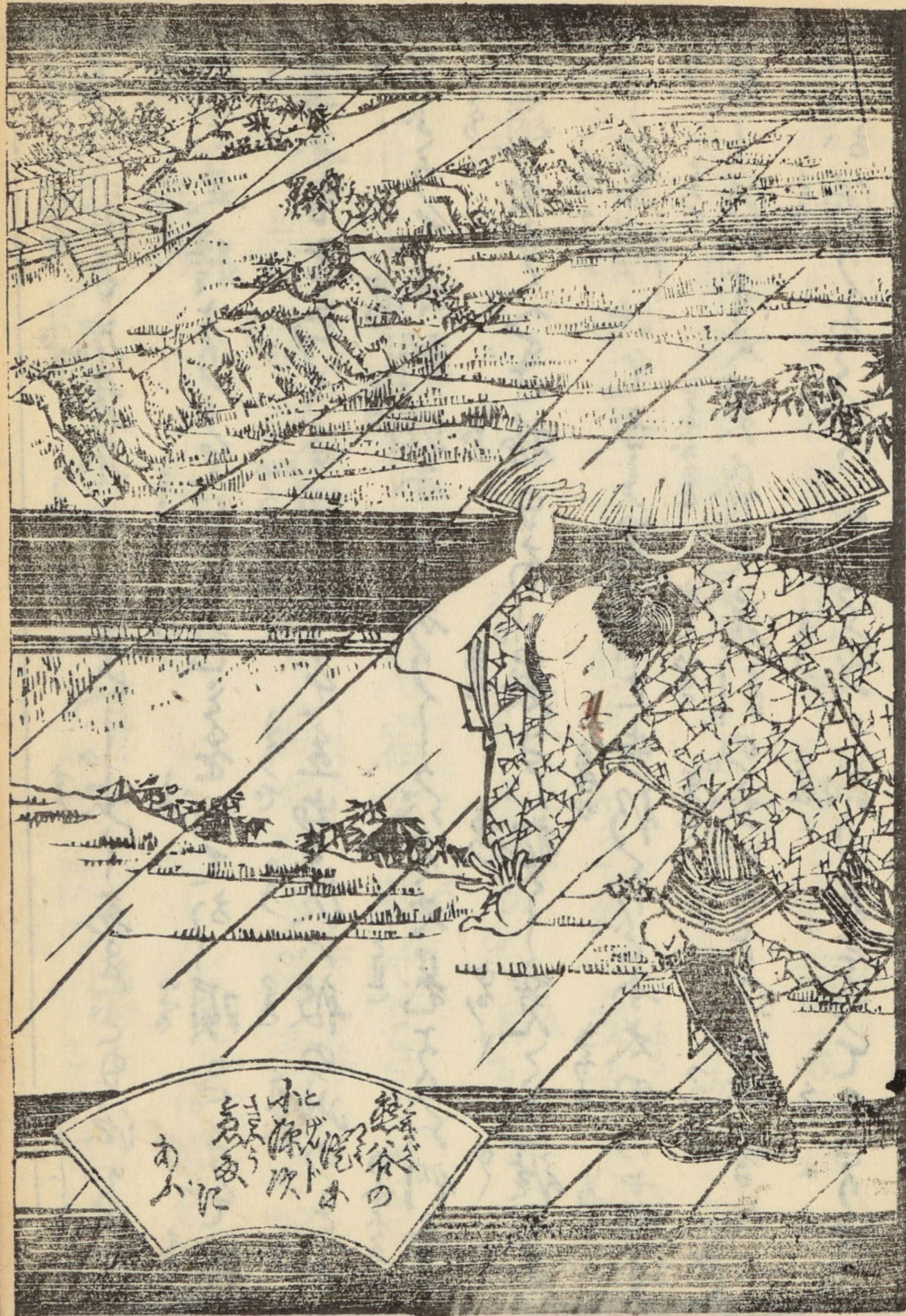
愛せありまをね。更お吾儕がお招と。一祈おとを
出て山読おさ。老爺さん由後立後ま小。何で由招
へて勧定しうと。いふごらうと必ひまは「とまきで自
己中業惑まのサ。お招うと云てそのこの。斤の対まを
おあをら小。まきと日あり。ア一件が。是非まは小居
いあめ。お招して見るとまき由ま。大愛のまあは悪
くまると。祝賀へ祝ける。然由あまは。ア一間へ入ま。ま
がつくま成て見ると。お波影しをまらるゆ由あり。疎小

つまろ 秘くしとふあろア。まろ 古報く 跡先を結合さく
考へちやア。どうせ其うア 性秘くろ。何で日此日のお説あり。
おろしそをさうろ 後小何由か由にを付やう 何卒古報
あて下さいナ。お作あろ 万一と。就新一で日就けらるるこ。
疎小指末小りけあいろ 一実小美理いあいのけきと。毒を
旅らば四ませど。モウ 初あのちやア 詮方がねく 一せんあろ
是えん些もそやろ 一全伴をさこの 携りだッ。容子小
よりやア そのあ小田 一アイ あるとけ 卑いざ 宜ヨ。その 携り

せ 准後をまるろろ 一々 史あろぶその 携りト 約束しや
とち 別是。脱小との 明の 朝。是を 帝の 眼を 告。まご 取く
小とち 出さると。本 街及つゝえ 由やん。まの 言。携へ 玉ん
とて。七八里ある 原乃を 鳴く 性けろ。照る 日ち 渾身
を 焼どろ。堪ごけ けま ば 体と 携あて。及おの 人の 外をろ
ごろむ。その 日の 夕暮やうくと。言 携小 着けま。その 夜
も 手 廻小 宿を かり。さて 聖日との 祈の 得え 由の 形らち
まひて。携ひの 金子を とり 集め。まよ 形町へ と 寄

うど。彼処へ三里のるあまは。夕暮より不便にて。まこ
言。渡ふその夜中泊り。翌日の新町へ行き。湯を巡
りてその集め。本庄宿へ健ふ二里。こを志まひて深谷
へ来るふその日中金く書けまは。そお宿りてその翌日。こ
の湯をそらち巡り。徳徳谷へと志しふ。その乃九と三
里あまは。申刻あまは。どありおける。かくてこまは。湯の葉
へ。四里八町とてその実の五里ふゆをき。地あり。その日
のうちお性んと。あつく。懐くべきあうねど。常お別る。

たとい今より夕風涼しく。乃を歩ゆ不攸りま。
急ぐ成刻の比及む。湯葉へ性まんと。湯色を
ふゆ急ま。挑灯准依お整へて。名おあま土子おきか。
爰お彼お源流の。老を穿がま。一自より。身三日の
主人ある。後ちあつのおまうん。私田の菘去麻布。若
後吉お幕り。今午七午忘おあ。その志
日ゆをきおあま。何卒五六日の暇を賜り。墓
系り。然ひ奉るといひけ。そまは。時



志し。勝手次第不出立まじ。女もあまじき法子の
助と史辨よりし銀の包を取てお頂き。さて傍
輩不申をまじし。小服もしと立寄。以て彼の此のとき
若らうし。未刻迄不申あり。うらまを申さうの何事
の道をおくべき秘申あり。異さ。枕火。寛く。性不美
トと笠願け。やうやくと歩行。わど不太田の宿不
来し。此のとき美昏て宿引の女い。そこ不集會。女
モシ。お泊りあう。うらま。宿方へお泊り来まつて下さうや。

お宿いと白お袂具の絹布で。若申お寐るのお伽が
りるあう。昔儂が出て申よう。その他申。おん宿女申。ごら
やん。ト紋をさくして引とある。そのときア。愛女さん強直
ごおア。ごときで二百五十あう。毎晩来て泊るべエ。女
お客さん串銭をツくる。おん宿女の別でござう。や。ア。
フム。お招う。幾千がど。女。おん宿女あう。強五百。そのから
他と違つて。ト。申。お何お申。ごらう。やせん。モシ。昔儂を
て呉さの。あやう。ア。その二百で袂の明るまで。お伽

をしくあげへまよ。~~~~~ どうもア程強直ごとく黙るま
あざむ性んとまるを。性せらせどと引止らま。史よと
そこ ところ ありあき だ ともま ぬ
そ処不泊る。その翌朝を去て尾崎の宿を
うちとる。申渡のうらち渡り。目泊を紙で然
谷へ来し以いそ申刻以かくて土をのせんと。
諸謝うらうら金持ぬ。夕の夜の旅の昔不あは夕風
さゆの涼しき小鳥巢まきゆきぬべし。あふ小鳥の老を
糸言流形町深谷の巻めて定めて二三日送るべし。されば

丁度ららぬ。出會苦どと考へて。後まきとく来りど
ゆ。恙も周の辨トる。まど迹不居るとやう。その程さ
ゆ計らまびと。一人ふ思按して。傍の茶店小尻うち
うけ「老婆さん大お異のう。ちのと濃りせぬいん
ど」モウけいはいちちまきまきせんまう。物前がをより
やまろう。お荘云の商人流がけいぢやア。大おか通う
あさうやまぞ。さぞお異りごうやせら。イヤ異くって
ゆきくってゆ。高妻あは是非が秘く。昔併ゆま人

ぢやアおへけきど。そのお花去の者人を逃蕪て来ん
ど。サテ一向くわくトリひり煙草らもうせて。うら
むむぐ「ッアそまら四苦方さまど。一筋乃とらひり
モシ迹先おあつてつると。あつく知色惜らどや
甘う「左指サま処ガあう絶くう。工老婆さん車
の次ハ二十二の花去も人誰か気の利く好男さど
が。些まうりの為を權のどを通りかへんごう「
どら由ハア「氣がまま「あんど。先刻をを通りまの
三下

例お別深の須差さんといふ旦那。今夜の足波崎の
菓まを押おへけりわアあうわくとつて。えんど一狼香
まので。急いで往家さいま「ツけ。まより他あやアも人
「流の通りまのどがナ何指どがナ。用をうてあて
とまません「左指う工吾儕が索ねるの。その須差さん
とらぢやアわく。ハテ何指「ナト老婆がままうらう
せど由心の程さく先刻ふとの所を急いであつて
ま「ま「ハア「まや一里の所由あつてん。たれど由ま

封疆のる。吹とちりいで日の書あん。左根あくと一入で良
改茶代を拂ひてとを。是れ不任してあきけるが。計
吹との。色小くまひ日の書さう。ア、宵月のあり
ゆせいとあんどをささく詮いあ。かる所小黄昏まふ。
晴る空由夏の僻暴小雲のち掩ひ。星の光りて由
あうざるまぶ。その暗きと漆のごく。そとぶ足さく光来
あきまふで。恐天の間ゆつえつらむ。おらうはと落し来
る。風りちと由小むら雨の。冬服子を抛るむらりの天雨りや

うまうねと笠傾け。天窓の掩へど水滂く。息を限り
小奔りけり

第六回

小源次い喘ぐ。五六町をうり奔りし。右近まは侍の地
茶堂ちりやとつらる火の光り。ここぞ地獄を佛の閣
あそくくあでと強入とば。昔より宿小むら雨を凌ぐん
とめ小狸む人あり。弓を小提する小田系挑灯。笠小
て面の定うあうねど。山形小差の字の。かの須差が下あり。

恙也とてとうと傍へより「ヤレくおあ招日雨舎」
さうゆあぐつて急小降出。殊小困らせり中し下り
祝あげ教見て物「イヨおあひ須差さん。おまうらモウ
曰五日天お日るぐ入まこまトいそきて此方由教を
りて「イヤおあひ小涼次さん。何し小今比ららるる
を「母の年忌を勤めやう」と昨日の昼迄服を貰つて
懸谷へ泊まらば宜のを。気が急まらんこの土子の夜路が
結り若らうと暮る所がこの大雨。イヤハヤ実小又あぐ

かうサ。然「あぐらあひゆけさ。おあ招小あめ不からて
此招あ嬌いしく招く大き小雨由小降おあ。モウきらい
るゆありまきとせ。何しやう鶴の巢まで。性忌小又ア治
りつらむ。まご一里半ゆありませう。一左招サ彼是との
位「ニ見うらア近いのサ。まごやうく酒別半。成刻あア
間がある。雨せし止バ教いあごまア一あくおと。あせ下
あのはゆ接る腰さげの懸いしぬ桃灯をぶし。搾めそ
吸つける。おああぬの音絶ぬまご。小涼次い面を。イヤ



夏のぬい妙ありんご。あが止るやまわし小。星が繁然と
まてまゝ。史あつ目ね出うけませう。マヤしくまゝの
花をこまゝ道中明くあり。有るまゝのさア。サア挑
灯を指ませう。ナニとらやア吾儕が持たせ。外小格別
あおのあートひひや出て先小五暴のぬの漆水右へ
除けまゝ左へ避て。性と既小十断然り。とれ左小草
生ひて。道の幅さく二筋小別まてのさ。授けまゝ滑小
あて性幅む。あま小へんあづるまろり。尾花言茅あけと

どの中言さぬ小道いり。さき希へ挑灯を照。あづるまろりに
傍る。あまくと身小降る。尾花をうけてあまかる小。ぬの漆水の
あまらう。挑灯小あうかまじ。置かひ小きや火へ消て。美美暗
小あるとい。こまゝとまろり腰抱の燧を出さんとまろりおろ
物をものまぐ小涼次が。あま小物を抱へ。影こ右小指さる
水の又柄中遠まるとまろり糸グ。肚のあつりをあまけ。差と
一髪左右のまろり。拂ひ除んとまろり新を力小怪して。まろり
昔しき息のゆきあつむ。さあ何及と七類八倒小涼次のまろり

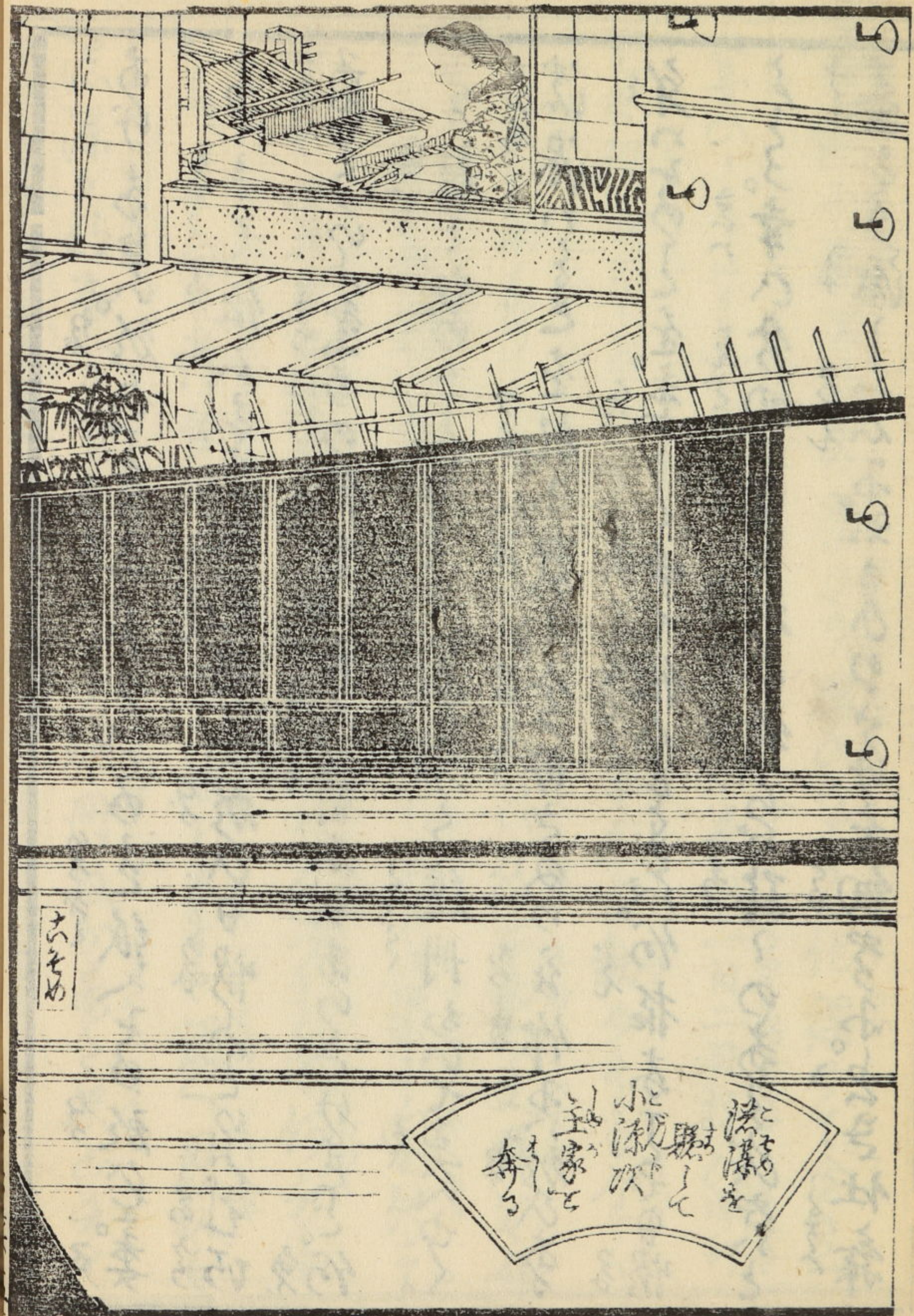
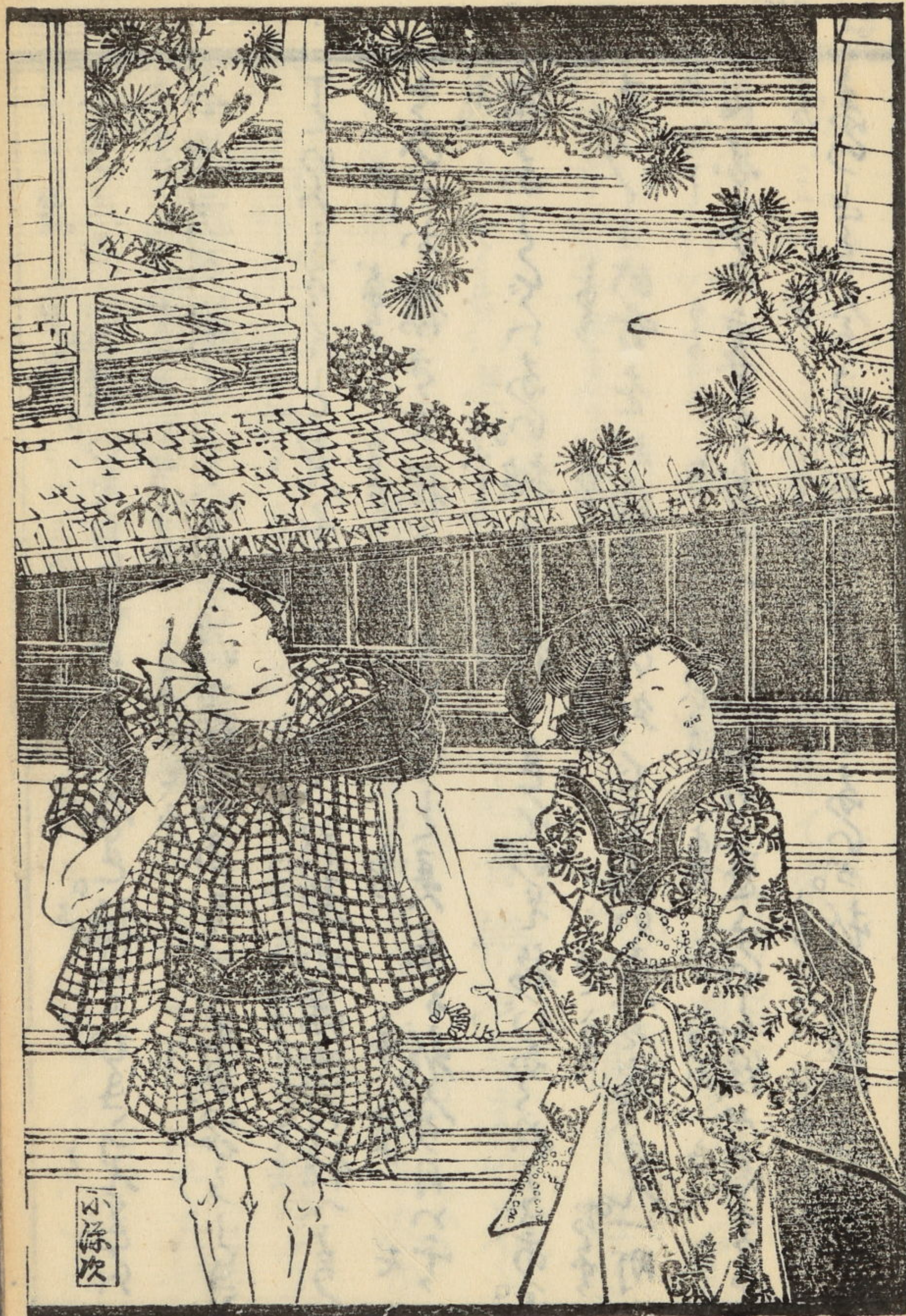
笑ひ「まう方を殺さるゝの送極大くらを逢らうと
日算多う不仕とのぞ運の濁どちの代も法深はた可
也が、持素金まを四懐中。くらやア四町察。ソ
をさしと突飛せむ二足三足後巡り。そのま、倒れ死を
げり。小源次らかろと号す。懐へ手をもつて探り
さる。胸巻を突出してとせあり小己が腹小控しつけ
とこの邪毒ごとと血小流せし。服指き処小抱り出
後をゆりぐくと立退く大膽不敵の極悪人小のりある

因果の條をりし。命をさし金さゆ。棄ひては極
放後の巻ふりし

作者のその聖朝土地のりの死骸を見つけ。大不
發きて莊を不祈へまう考物を改めけり小。莊を
沙常約撰して。須屋去を希との懐面あまむ
招飛御おて知らせ紙を承。元来家族とのふの
あ。跡を護まう老生管の武去清は本文小のを
く。あうまぬ新業をあう放法深がをさる

再読小深次いその夜さう。思ひのづく仕繰せて。金さ
奪ひとりけまぶ。その翌日の夜去小集と一日二日おびり
まや程ゆうと桐生へ帰り母の事を勧めし。金さ
お深由まあうと空深小程まらつて後お集のま帰いこれ
と由まらうを。あの小奇特と賛嘆し。ゆりく渠ふふを馳ま
かくて四五日を終るやどあまや七夕小遊づくと。何方由
おまや手向の詩多短冊紙や色紙とあまや頼く母親と
法深が釣をへりちまう。サア短冊紙が来る。次ひまて

あげあまの。然ひごのあまのの。あま紙へその然ひを委
まきまき信んままら。何指あ然ひ由懐ふとの。巧
真とりのありの仕方。百人一首小由あのとけまら。何
ごう種くむらうの。あまトひあまら短冊おいてあへむく
深深いことを机小裁し。今母さあのを作あ然ひあ
身のをそのを。あま一くまて信んままら。何指あ丁での懐
らう。幸ひ今田の身の然ひ新らぶ。あまのあまらんやんと
墨まらう流し一ふふ。おりのひのけを細まらふ。あま仕繰



此の
深澤を
見ると
小深次
主家と
奔る

をり人の気勢けいせいのそぎ机つゑの下したへ入いりて換かはむと云いふ
小深次こがへじが。徐々じゆぜんと入い来る。深深こゝろいふ。おまへへて申まをす。い
このいふと。身を及およびて知らぬ。教ね小深次こがへじの傍そばへより
そひ「お嬢ぢやうさま私わたしが。何なにぞいふと。又またお教ね。今日けふの言こと
招まふと云いふ。あの。越えあへく。教ねさま。いふ。お招まふと云いふ。
まア。く。此こゝ方ちやうを。お向むかひ。あつた。外ぐわいで。おあ。の。表ひらを。おまへへ。一いつ町ちやう
月島つきじま子の。裏うら小深こがへへ。一寸いちじゆん内証ないしやうで。さういふ。使つかが。来きて。さう
まの。さう。今いまさう。面めん月次げつじ才さいの。あ。い。が。教ねさま。深深こゝろ不ふ別べつと

あ。い。何なに胸むね。う。後ご不ふ実じつの。出で来きて。実じつ不ふ内証ないしやうで。おまへ
胸むね。い。い。の。表ひら向むかひ。替かの。あ。い。個こ嬢ぢやう。あ。い。おまへ
い。せ。ま。い。ま。おまへ。小深こがへ。ね。い。け。い。が。花はな去さへ。連つらて。迹あとは
換かり。と。ま。い。あ。い。人ひとの。承うけ知ちの。と。昔むかし儂なまが。と。ま。を。来きて
と。を。通とほす。さ。い。ま。う。也や。出でて。来きる。苦くる。ま。い。何なに招まふ。大だいなる
の。教ね。外ぐわい。小深こがへ。おまへ。人ひとの。あ。い。おあ。の。氣き。性じやう。い。帯おび。と。知ちつて。る。
さ。う。也や。呼よぶ。小深こがへ。と。い。ふ。何なに卒そつ深深こゝろ不ふ内証ないしやうで。お招まふ
云いて。い。い。と。い。ふ。い。は。日ひが。著しやくて。の。と。い。ふ。さ。う。が。一いつ人ひとと。い

出泊まい。其処番由おあがぬ在あく。世結きりてきく
らま。と腹を割てのお教くゆゑ。実の胆を洗しきりてが。
男と見うけて教まきて。泣へいひぬ昔併由荏去ッ子。
とりあアお按トあきいませあ。知は初くやう不きう
ませう。と清合て来きり。が併おあ招の方あア。
史程まぐゆありませんう。とりあア昔併の初うね
ふト初を巧くふいんどく。知うぬ変女の目書ふ沙汰
があるうと拍不候つ。おろくあまは。胸得く教極し。ホニニ

左招う。其方重く言う。揺奔りのと名りけき
ど。不思し。うらうら初あつて。今の殊不詮方があひ。
史あう昔併の論くと。洗まぐゆ不准候をまるく。そ
方多処まぐ連て往て。とりあア些とゆお按トあきんを。
とを慈母さんや女ども小。曉らまねくやう不あきう。下
初書めて。とち去る初。深深の目書音候を。候とる
身小由けいんを。亡命まるく殊不よう。モウ。この家の見
納めうと。おろくばい。と悲しき。標場涙き。落涙を

人小見^ひろく^{ろく}と弱^よるんを鬼^{おに}お^おけ^け。發^はの物^{もの}ろく^{ろく}を智^ち
の家^け張^{ちやう}ニツ^にをろ^ろを智^ち張^{ちやう}ね。ア^アろ^ろ不^ふ畏^ゐく^くて^て洞^{どう}考^{こう}小^{せう}を^を
巧^{くわう}ミ^ミ百^{ひやく}兩^{りやう}財^{さい}。こ^こは^は良^{りやう}人^{にん}の助^{すけ}小^{せう}と。只^{ただ}常^{じやう}急^{きゆう}不^ふ暗^{あん}迷^{まい}不^ふ
ん^んの暗^{あん}の英^{えい}昏^{こん}さ^さぎ^ぎ時^{とき}か^かい^いろ^ろと小^{せう}深^{しん}次^じが。相^あ馬^ま小^{せう}徐^{じゆ}と庭^{てい}
口^{くち}より。忍^{しの}び^び出^でる^る寶^{ほう}門^{もん}。衆^{しゆ}へ^へる^る是^ぜを^を暗^{あん}考^{こう}あ^あて^て。小^{せう}深^{しん}次^じ小^{せう}
を^を曳^え是^ぜの^の馬^ま子^しを^を存^{ぞん}て^てを^を奔^{ほん}と^とける^{ける}。

徳唄三人娘第二編卷之下 後

